

# 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成28年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	東京大学	整理番号	J01
プログラム名称	統合物質科学リーダー養成プログラム		
プログラム責任者	小関 敏彦	プログラム コーディネーター	川崎 雅司
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当初計画を着実に実施するとともに、採択翌年度の現地視察での指摘や、PO フォロワーアップ報告書における留意・指摘事項に対して具体的かつ速やかに対応することによって、より優れたプログラムに向けた改善も確実に行われている。</li> <li>・中間評価の留意事項である企業インターンシップの履修者数増加に向けた取組については、今年度より対象機関を国立研究開発法人等の公的研究機関・官公庁に拡張し、研修期間の幅を2~3か月から1~3か月に広げるとともに、相談窓口の設置とインターンシップ情報の提供により、学生の積極的な履修を促す取組を開始した。また、平成29年度より、工学系共通科目の枠組を利用して、インターンシップ履修を本プログラムのコースワーク講義科目(2単位)として認定する予定である。なお、実践的研究訓練として用意されている自発融合研究、長期海外派遣、企業インターンシップから一つを選択するにあたって、学生は海外での長期研修の経験を最優先にする傾向があることが支援学生との意見交換からうかがえ、その結果としてインターンシップの履修割合が低くなっていると思われる。しかしながら長期海外派遣とインターンシップの2つを履修、あるいは履修希望している学生が少なからずいることは評価したい。</li> <li>・中間評価の第2の留意事項である消極的な学生のケアや底上げについては、2名の指導教員に対する学生の履修状況等の報告や副指導教員との3か月毎の面談、及び若手教員との交流等により、コミュニケーションをとる工夫に努めている。また、理工連携キャリア支援室との連携により、企業での勤務経験のある支援員等がキャリアパス相談・指導を行うなど、その実績も出始めている。そのため、学生の自主性・自発性に委ねるだけでなく、教員の積極的な取組と努力に対して敬意をもって評価したい。</li> <li>・中間評価の第3の留意事項であるプログラムの継続・発展については、総長の下に設置する大学院教育検討会議において修士博士一貫学位プログラム制の「国際卓越大学院」創設に向けて学内の予算措置がなされており、本プログラムの一部を継続・発展させる検討が進んでいる。</li> <li>・女子学生の確保については、今年度の修士課程2年の女子学生数は7名に増加し、プログラム学生数に対する比率は17.1%であり、プログラムを構成している9専攻の全学生数に対する比率10.2%より高い数字になっており、取組の成果がうかがえる。しかし、博士課程の学生数で見ると、全学生数に対する女子学生の比率9.8%に比べて、プログラム学生に対する比率は7.4%と低い。一方、外国人学生の受け入れについては、博士課程のプログラム学生数に対する外国人学生の比率は7.4%であり、全学生数に対する比率23.3%よりも低い。これは、本プログラムの対象外である博士課程から入学する外国人学生が全学生数に含まれていることによるとと思われる。今年度の修士課程2年の学生数で見ると、プログラム学生に対する比率は19.5%であり、全学生数に対する比率12.2%よりも高い。そのため、女子学生の場合と同様に、次年度以降の動向を注視する必要がある。</li> </ul>			

## 2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- 企業インターンシップに関して、受け入れ企業の情報とともに履修した学生の体験や学びの報告を学生は望んでいる。受け入れ企業との間の守秘義務に配慮しつつ可能な範囲で情報を提供するなど、今年度より設置した相談窓口の活動が浸透することを期待したい。
- 本プログラムの主たる専攻は工学系研究科物理工学専攻であるが、現地視察に出席されている教員はほとんどが物理工学専攻の関係教員である。本プログラムは物質科学に関わる化学系や電気系等の広い分野から構成されているところに特徴があるので、今後は広い分野の教員の意見もうかがいたい。